

世界参照の記号論

——モノの検索，コトバのエンジン——

浜 口 稔

1. 大航海後から普遍言語へ

1.1. モノとコトバの氾濫，空想の人工言語

ルネサンス期から16世紀にかけてヨーロッパの主要な港に、アフリカ、レバント、インド、極東、新大陸から、異郷の文化、文物、宗教、言語が洪水のように押し寄せ、見慣れぬモノが氾濫した。一神教の秩序に容易には収まらない新事態。これら不可解な事物を分類しなおしてキリスト教秩序のなかに接收し、理解しやすい表現に書きなおしてヨーロッパの言語体系＝世界観のなかに編入する必要が出てきた。

当時の知識人たちはそれを課題とし、新しき名辞体系——彼らはそれを「哲学言語」や「普遍言語」と称していた——を構築しようと躍起になったのだが、その実体は普遍百科学的伝統に連なる博物学であった。さらにいうなら、そんな伝統を受け継いだ「哲学言語」や「普遍言語」とは、異郷世界の物品をヨーロッパ人の博物館（＝概念世界）に収納できる名札付き事物として自動登録できるシステムのことであった。その珍品のひとつに、非ヨーロッパ系の異郷言語があったのである。

ヨーロッパ諸語のほかにも文明の礎となりうる言語が数々あるという新事実は、とりわけ大航海以降、人口に膾炙するようになり、その認識の規模も、

アフリカ大陸、アラビア諸国、インド、東南アジア、中国、南北アメリカ大陸と、世界を股に掛けた交易や宣教活動によって途轍もなく広がっていた。大航海はそんな異郷言語のブームをもたらしたのである。それにしても言語ってこんなにあったんだ、東洋の連中の話す肉声は文字からは分らない、おれたちのアルファベットとはえらく異なっているぞ、このトゲトゲイガイガ(=字画)の多い字面はなんだ、音の抑揚で意味が違うのか、これは音楽言語なのか、とかなんとか、彼らには珍妙に映った言語や文字を話題にして沸き立っていたことだろう。

そんな新言語の発見が相次いだ16、17世紀、奇妙な言語を盛り込んだ空想物語が続々と書かれたのも、そのあたりの事情を反映しているのだろう。異郷世界から届いた文物を手掛かりにして、知的存在の棲息が見込めそうであれば、絶海の孤島、未知の大陸、地底世界、月や太陽の世界と、なんでもかんでも材料にし、それらしい言語遊戯を繰り広げてみせたのだった。

さらにまた、ガリレオ・ガリレイ(1565-1642)の地動説、そして『星界の報告』(1610)によって、天界にも地上界と同じ地べたがあることが明らかになったのであるから、人間もそこに上陸できるのではないかと、異世界への空想を異常に膨らませたのも無理はない。星に上陸するとは突拍子もない話である。大権威であったアリストテレスの自然学も、「存在の連鎖」(*chain of being*)も、天界の秩序もあったものではない。大航海や月面の発見を機に、戯作者の空想は堰を切ったように氾濫しただろう。ヨハネス・ケプラー(1571-1630)はSF幻想奇譚『夢』(1634)を著し、ジョン・ウィルキンズ(1614-72)に影響し、ウィルキンズはそんな新科学の気運にも励まされて『新世界の発見』(1638)をしたため、それがジョン・ミルトン(1608-74)の『楽園』(1667)の着想源になったといわれている。

のちにジョナサン・スウィフト(1667-1745)にも影響を与えたフランシス・ゴドウィン(1562-1633)の『月の男』、そしてその影響の下で書かれたシラノ・ド・ベルジュラック(1619-55)の『日月両世界旅行記』(1652)は、

文字どおり空想の翼をひろげて異星へと飛び立った星間旅行記である。そんな見てきたようなウソをホントめかすために書き添えたのが、人工言語であり、それがふんだんに盛り込まれている点が、大航海以降に書かれた空想物語を特徴づけている。

もちろん、ただ創作しただけではなかった。語形変化、動詞の活用、統語法など、微に入り細を穿って、言語の組織をいかにもそれらしく暗示しながら披露したのだった。そんな人工言語遊びを、細かな品詞や活用や文法規則などで、それっぽく見せることができたのは、異郷言語の報告が活版印刷術のおかげで出まわるようになったからである。その頃から俗語や文法の教本や研究書が出版されはじめた背景も、是非念頭に置いておく必要がある。

翻訳版「主の祈り」あたりを音表記し、自国語と併記してみせれば、絵空事も嘘八百も、宣教師たちが集成した多言語辞書のように真実めいて映ったことだろう。いずれの物語も、異郷世界の博物誌をヨーロッパ人にも分かる語彙や文法で肉付けをすることによって、ヨーロッパの認識体系のなかに見慣れたモノや情報を編入するための体系的な語法を模索していたように思われる。

作り事とはいえ、さすがに語彙や文法や用例を盛り込むと、読者は鵜呑みにして騙されることもあったようだ。なかでも、ロンドンに渡って台湾人になりすまし、『台湾博物誌』(1704)を著して地誌・歴史・言語を巧みにでっちあげたフランス人作家、ジョージ・サルマナツァール(1679-1763、実名は不明)は、ペテン師列伝に名を連ねる大物である。スウィフトの『ガリバー旅行記』(1726)にも影響を与えたと聞く¹⁾。いやあ、ウソもホントも混ぜこぜ！ にぎやかなものである。

しかし、話はこれで終わらない。ここで、これらの空想奇譚に盛り込まれた人工言語が、実際的な人工言語ブームを反映していることや、やがてはそれが普遍言語や国際補助語につながることを、とくに示唆したいわけでもない。それはそれで興味深い系譜を浮き彫りにできるが、それ以上に重要な

は、大航海以降、異世界情報がどっと押し寄せてきただけでなく、それに宗教改革、新興言語の誕生、ラテン語の失墜、科学革命などにもなう情報の氾濫が加わって世界の秩序を揺動させ、ヨーロッパの知識人たちを悩ませていた情勢である。

1.2. コトバとモノの体系化計画

自然は体系的な秩序をなしている。それを構成する事物(モノ)にも、名前(コトバ)にも、自らが由来する根拠、つまり神の意匠、いまふうにいえば、設計構想がある。それをどうやって浮き彫りにするか。それと併せて、モノをあれもこれもと集めて整序しようとする満遍なき知、百科全書、博物学の伝統がある。そして、そんな伝統のなかで受け継がれていた一種の思考モデルがある。それを「存在の連鎖」という。

中世を通じて影響力を及ぼし続けていた「存在の連鎖」とは、ようするに、人間を頂点として、もっとも下等な生物まで、すべての生物「種」は途切れなく階層的に連なっているとする世界像である。頂点にいるのは人間、その下にはサル、さらにその下に四足獣、あとは鳥、魚、昆虫、木、草、鉱物、土、水、大気と、生き物から無生物に至るまで、単純な構造のものから複雑なものへと連なっていく。要するに、事物がすべて世界という巨大標本箱の仕切りのどこかに納まるべきであることが創世の当初から定められているというもの。したがって、この体系的秩序は、絶対に変えてはならない。「偉大な」存在の連鎖と呼ばれた所以である。

この伝統の分類体系は、科学革命の17世紀を迎えても、博物学者たちの心を捉えて離さなかった。自前の観察データをもとに自然の事物を表記し尽くした新たな分類体系を築こうとヨーロッパ中を調査旅行してまわったフランシス・ウィラビー(1635-72)とジョン・レイ(1627-1705)が、つぎつぎに見つけた生物を、どうやってこの伝統の秩序体系に収納するかを考えている。そして正しい収納場所を設けようとするなかから、収納の根拠となる本質に

相当する「種」の概念を着想する。のちの『植物全誌』（1686-1704）で、「同じ種子から繁殖し永続的に繰り返すものを種とする」というレイの「種」の概念、すなわち、いくら世代を経ても変化しない本質は、のちのリンネの「自然は飛躍せず」とも重なる一種の普遍概念である。

その後レイは、ロイヤル・ソサエティの実務全般を仕切っていた第二事務局長ヘンリー・オルデンバーグ（1615?-77）にその計画を提出し、それによりレイは、ロイヤル・ソサエティの特別会員に選出され、それがウィルキンズ（第一事務総長）の注目するところになったのだ。この「本質」を直截に表す完全なる普遍文字——ウィルキンズは「事物記号」（*real character*）と呼んだ——を考案しようと腐心したのが普遍言語構想者たちであったのだ。

ウィルキンズの「哲学言語」は、博物学における見本（モノ）に名札（コトバ）を付けて陳列する方法（文法）を介して、すべての概念に直接対応する名辞の体系を編纂しようと志したのである。神から授かった神聖言語、すなわち「アダムの言語」に匹敵するような、神の被造物たちの生態秩序を映し出す完全なる名辞体系を構築すること、それがすなわち、普遍的な哲学言語の目標であった。自然界の階層構造、つまり事物の秩序を根拠にもち、その秩序を正しく映し出すコトバ（名辞）の体系を構築するための表記言語を、まずはどう設定するか、それが普遍言語運動の最初期の課題となったのだ。

2. 暗号から事物記号へ

2.1. 事物記号——バベルの呪いの解縛文字？——

まずは『学問の進歩』（1605）のフランシス・ベーコン（1561-1626）のことばに耳傾けてみよう²⁾。

ことばと語についていえば、それらについての考察が文法学をうみ出し

たのである。というのは、人間はそのあやまちゆえに奪われた祝福を回復しようといまなおつとめているのであって、最初の人類全般へののろい〔『創世記』13の16-19〕に対しては、ほかのすべての技術の発明によって抵抗してきたように、第二の人類全般へののろい、すなわち言語の混乱〔同上、11の6-8〕からは、文法学によってのがれようとつとめてきたゆえである。

「アダムの楽園追放」に次ぐ「バベルの塔」での言語分裂という天罰（のろい）を「文法学によってのがれようとつとめてきた」とはどういうことか。文法学の研究とは「のろい」の解縛術であるともいいたいげである。人類の始祖が神と直接対話できた楽園から追放されただけでも災難であったのに、その子孫がバベルの塔で唯一の完全言語を剥奪されてしまったのだ。それ以来、神の知覚野を、つまりは実在世界をじかに感じ取ることができなくなったわたしたちには——いや、罪深きヨーロッパ人たちには——、いうならば、アダムの命名行為によって浮かんできた原風景を再現することは、嗚呼、哀れなる哉、もはやできなくなったのだと、ベーコンは嘆じているかのようである。もう一度父なる神と対話したい一心で、キリスト教圏のインテリたちは、今日に至るまで、失われた言語を回復しようと足掻き続けたのだった。

では、神との意思の不通をもたらしたこの「のろい」をどうやって解いたらよいか。のろいを解くには、つまり施錠された通話の門を開錠するには「普遍の鍵」(*clavis universalis*)³⁾が必要である。いまでいう暗証番号（記号）のようなものである。この神意、あるいは事物の秩序の解読に用いる暗号文字を、ベーコンは早くから「事物記号」と呼びならわしていたのだった。ここで、「事物記号」は暗号術の伝統にかかわってくるのである。

2.2. 暗号から事物記号へ

さて、暗号は当事者同士にしか分からない規約をもとにしている。その規

約とは、数字や記号の表示作用と、その結合法で成り立っている。その規約を習得しなければ、暗号化も暗号解読も覚束ない。しかしその点でいえば、普通の文字だって有意味な結合規則を学ばなければ、暗号も同然だろう。文字を読み解くことは、むかしは特権階級にしか許されない特殊技能であった。文字を操って国運を占い、国政を書きとめ、国法を操って国事を遂行していた官僚たちは、文盲だらけの庶民にとっては畏怖すべき魔術師であったことだろう。厳かな写本に記された妖しげな描線をなぞりながら、それを声に変えて神の伝言だと説いて聞かせた僧侶たちの説教も、ことさらに神々しさを帯びたことだろう。

ちなみに、文字を読む技術のことを、ギリシア語で *grammatikē* と綴る。いまでいう文法である。文法とは、文字 (*gramma*) の技術 (*technē*) を意味していたのだ。しかもその異形の *grammrye* には「魔法」という意味までであるとすれば⁴⁾、これだけでも、常人には近寄りたがたい魔術であったわけである。こうした文法、ペーコンが事物記号と抱き合わせにして示唆した「哲学文法」(*philosophical grammar*) とは、さまざまな名前の文字を結合したり、分離したり、置換したりしながら、名札付事物を生成させたアダムの言語に重なるものであったと推察される。アダムは音を組み合わせて新語(コトバ)を作り、名指によって神が野に放った動物(モノ)を人間の認識の野に炙り出してみせた。実在世界を人間に知覚できるものにした聖なる原初のことば、それが「アダムの言語」であったわけである。

文字や記号の操作によって事物の秘密を開示したり、事物の生成にかかわったりする暗号術、記憶術、錬金術、カバラの数秘術、ルルスの術に、わたしたちは創世神話にかかわるヨーロッパ人の奥深い動機を垣間見なくてはならない。とりわけ、14~5世紀に暗号が普及し、学者たちは発見を秘匿するためにも利用したようであるが、ルネサンスの神秘主義から普遍言語の17世紀まで、暗号術についての論考が続々と生まれている。主だったところだけでも挙げてみよう。

まずはカバラの研究者ピコ・デラ・ミランドラ (1463-94), その影響を受けたハインリッヒ・コルネリウス・アグリッパ (1486-1535), ジョルダノ・ブルーノ (1548-1600), レオン・パティスタ・アルベルティ (1402-72), ヨハンネス・トリテミウス (1462-1516), ジョヴァンニ・ポルタ (1535-1615), ブレーズ・ド・ヴィジュネル (1523-96), デッラ・ポルタ (1535-1615), ヨハン・ワレンティン・アンドレーエ (1586-1654) などなど, これらの面々が, 記号の置換を, 神意を読み解くための秘術のように扱っていたのである。

そしてこれらの人物が活躍していた時期は, ヨーロッパ人の言語意識が先鋭化していった時期と重なる。普遍言語の火付け役のベーコンは, こうした暗号法の伝統に導かれながら, 「事物記号」と「哲学文法」の構築を提案するのである。

2.3. 真正の文字としての事物記号を求めて

ベーコンにとっての「事物記号」とはなんであったのか, そして「哲学文法」とはなにを目指したものであったのかを考えてみよう。ベーコンは事物記号を提案するまえに「言葉は大抵は一般大衆の理解から作り出され, 普通の知性にとっては最もはっきりした線で事物を区切るものである」⁴⁾と述べている。コトバによる事物世界の切り分けである。しかし事物をさらに仔細に観察し, モノ(事物)を区切る「最もはっきりした線」を引こうとするとき, 日常言語の限界に逢着する。なにしろ「言葉」は, 矛盾や不条理や嘘や情動に満ちた社会で用いられており, 曖昧さと誤謬にまみれているので, 「事物」の精密な表記には不向きである。ベーコンはこんなふうにいる⁵⁾。

そこで(数学者たちの流儀と思慮にならって), まずこれら〔の言葉や名称〕から始め, それを定義によって整理することがより賢明であるかも知れない。だがこうした定義も, 自然的物事および物質においては, いまのこの悪弊を矯正することはできない。なぜならば, 定義そのもの

も言葉から成り立ち、言葉が言葉を生み出すわけだからである。

深刻な「言葉」不信の表明である。学者たちがそのまま、そんな言葉を用いる限りは、「言葉および名称についての争いに了る」ので、言葉や名称を定義しなおしても新たな混乱を招くだけである。こうした言語の欠陥は、確実な知識を追い求めていたベーコンにとってはかなり深刻であった。「定義そのものも言葉から成り立ち、言葉が言葉を生み出す」のであれば、真理の獲得に人間言語を用いるわけにはいかない。

そこでベーコンは、通常の間言語を用いるのをやめて、「数学者たちの流儀と思慮にならって」明確で直截にモノを表す記号を考案すればいいではないかと提案するのである。明確な視覚性と図像性をもつ文字であれば、表示対象である実物をそのまま表すことができる。モノの直截性と視覚性を反映したコトバであれば、無闇に観念的で術学的な言葉遣いを回避でき、「市場のイドラ」——真のコミュニケーションを阻むコトバの幻影——に理性を曇らされることなく、実り多い哲学的議論ができるようになるのではないか。

これが、ベーコンが事物記号に寄せた期待であったわけである。そこで、身振り、象形文字、化学記号、天文学的な図形、音符、速記記号、算術・代数などの視覚記号が候補にあがったのだった。そしておあつらえ向きに、ベーコンの即物的な記号観にかなり大きな影響を与える文字が、ユーラシア大陸の東方から伝来していたのである。中国の事物記号、すなわち、「漢字」である。

2.4. 東アジアの普遍文字、漢字

中国の事物記号（下記「実物符号」）について、ベーコンはこんなふうにいっている⁹⁾。

シナや極東の王国では、一般に文字をも語をも表わすのではなく、事物

あるいは観念を表わすような、実物符号で書くのがならいになっている。そしてそれゆえに、たがいに相手の言語を理解しない国々と地方が、それにもかかわらずたがいに相手の書き物を読むことができるのであるが、それは符号のほうが言語の及ばぬほど広い範囲に了解されるからである。

東アジアにおける国際共通語としての漢字の表意システムに魅了されたベーコンは、そんな「事物符号」を考案すれば、事物の哲学的真理を正しく捕獲し、それをもとに誰とでも速やかにコミュニケーションできるようになるだろうと期待したわけだ。このベーコンの問題意識を継承した人物が、ウィルキンズなのである。ウィルキンズも、漢字のような文字への期待を、暗号についての研究書『マーキュリー、すなわち秘密にして迅速なる使者』でこう披露している⁷⁾。

中国と日本の人びとは、言葉のうえでは、ヘブライ語とオランダ語ほど違うというのに、この共通の文字の助けを得て、相手方の書物や手紙を、あたかも自国のものであるかのように、十分に理解できる由である。

ウィルキンズが漢字に魅了されたのは、漢字を構成する字画がそれぞれに意味をもっているからであった。字画そのものは表音的に体系化されているわけではないが、それぞれ事物なり概念なりを指し示す単純表意記号のようなものであるから、それさえ了解しておけば、それらが複合された漢字の意味は、それを構成する字画の掛け合わせによっておおよそは理解できる。字画の配列を変えると新たな意味を形成できる漢字のような、概念記号を結合させた複合文字を考案しようと思いついたのだろう。ウィルキンズの事物記号の構成は基本的に漢字と変わるところはない。しかし漢字は事物記号に比べると重大な欠点があると、ウィルキンズはいうのだ。

ウィルキンズは『事物記号と哲学言語へ向けての試論』のなかで、漢字は

構成単位である字画そのものが複雑である、多義的で曖昧である、モノに即応しないものがある、ようするに「この文字の複雑さや難解さは別にしても、〈文字〉の外形と、表示される事物とのあいだには、〈親縁性〉と〈対立〉との関係からいっても、(わたしが判断するかぎり)いかなる〈類似性〉もないし、派生形を必然的に保証する余地もないように思われる」⁸⁾ので、事物記号としては中途半端だといっているのだ。

ひとつのコトバをひとつのモノに対応させようと目論んでいたウィルキンズからすれば、これはまさに致命的な欠点であった。この欠点を克服する文字を、つまりは普遍的な「哲学言語」にふさわしい「事物記号」を提案するのであるが、それについてはあとでまた言及しよう。

そして少し時代は下るが、イギリス普遍言語に注目していたゴットフリート・ライプニッツも、漢字については格別の注意をはらっていた。唯一の生前刊行本である『人間知性新論』のなかで、対話者のひとりテオフィールを通じて、漢字は「私たちが中国と呼んでいるあの大きな国に住む多くの民族間に言葉による交流を打ち立てるために、だれか有能な人物によって一時に発明された」⁹⁾といっているのだ。オランダの東方学者ジャック・ゴリウス(1596-1667)から仕入れた情報のようであるが、漢字は「だれか有能な人物によって一時に発明された」人工の文字体系であるという観点から、ヨーロッパでも同じような文字を人工的に構築できると希望を抱いたのだろう。

「多くの民族間に言葉による交流」を可能にする漢字は、ライプニッツにとっては一部普遍記号の条件を満たしてはいるが、テオフィールはさらに、この漢字をもとにして、漢字よりも優秀な新たな記号を考案することができると主張するのだ¹⁰⁾。

彼ら〔中国人〕よりもずっと通俗的で良い普遍的記号を導入することもできます。言葉の代わりに小さな図を用いれば良いのです。それらの図は見える事物をその特徴で表現し、見えないものはそれを伴う見えるも

のによって表現するのです。そして〔文法上の〕屈折や小辞を知解させるのに相応しい一定の付加的な徴を結び付けてね。

「事物をその特徴で表現し、見えないものはそれを伴う見えるものによって表現する」小さな図とは、どのような文字だろうか。それを用いれば、全世界の人々とコミュニケーションできるようになり、モノ（万物）の目録を作成できる。テオフィルは、それはアルファベット文字や漢字とは違って、制度的な約束なしで、見れば即座に分かる「それ自身で意味のある図」であることを強調しているが、残念ながらライブニッツは、サンプルすら残してくれていないのだ。

いずれにせよ、ウィルキンズもライブニッツも、漢字を事物記号として認めはしたものの、習得の容易さという観点からは問題があるので、もっと有効な文字を考案する必要があるという点では一致していた。この新しき記号が考案されれば、どんな新しいモノや情報が押し寄せてきてもダイジョーブ。記号の結合術によってたちどころに哲学言語のうちに編入し、必要な項目を随時引き出して再結合し、創造と発見の仕掛けとして活用できる。しかしまずは事物記号を用いた情報の整理整頓をしなくてはならない。としたところで、人間の脆弱な記憶力を補う、弁論術、論理学、弁証法、修辞学にかかわる「記憶術」の伝統から派生したあるシステムが、つぎなるテーマとなる。

3. 記憶術から表覧シンボリズム

3.1. 記憶術から情報の管理と活用

記憶術 (*ars memorativa*) は、古くは、アリストテレス (BC384-322) の『弁論術』や『記憶と想起について』において論じられ、ギリシャ・ローマを経由して、17世紀へと受け継がれていた。哲学言語と記憶術との関係について論じる前に、まずはケクロ (BC106-43) が『弁論家について』のな

かで披露したシモニデスの逸話が有名なので、簡単に紹介しよう。

キケロによると、記憶術を考え出したのは、ギリシアの詩人、ケーオスのシモニデス（BC 556 頃-468?）である。あるときシモニデスは宴席に呼ばれていたが、その途中で詩のなかで賛美した双子の神に呼び出され外に出る。そのとたん、屋根が崩れ落ちて客人全員が瓦礫の下敷になって圧死する。シモニデスは災難をまぬがれたのだが、おびただしい遺体は誰が誰やら分からぬほど損傷していた。それなのに、シモニデスは客を残らず確認できたのだった。どうやってか。遺体（モノ）の在り処（コトバ）を屋内の各ポイントを手掛かりに照合することによって。これが場所記憶術となるのだ。それは弁論術にも転用できるのではないかというのが、キケロの提案なのである。シモニデスの記憶術を評して、キケロはこのようにいう¹¹⁾。

彼〔シモニデス〕によれば、この能力を訓練によって身につけたいと望む人は、記憶しようとする物事についての心のイメージをつくり、それらのイメージを場所と結びつけて記憶しておくべきだという。そうすれば物事は場所の配置どおりに順序正しく整理され、イメージがもとの物事を示してくれる。つまり場所を蠟板がわりにして、イメージをそれに書きつける文字のかわりに使うのである。

屋内の柱や椅子や扉、神殿の柱間、コーナー、アーチなど、分かりやすい事物に着目し、それらを話題（topica＝場所）の切り替え、あるいは弁論の節目に利用する。それぞれのモノを取っ掛りにして弁論というコトバを収納し、屋内の間取りや家具（コンテナー・メディア）の連なりを目で追っていけば、演目の内容（コンテンツ）を躊躇なく遅滞なく手繰り出していけるのではないか。さしずめこれは、弁論シナリオの段落化だろう。

このシモニデスの記憶術が、世界観とのかかわりで展開していくのは、容易に想像が及ぶところである。早くは『弁論術教程』のクインティリアヌス

ス (35 頃-100 頃) にはじまり、アルベルトゥス・マグヌス (1200 頃-1280), 『神学大全』を著したその弟子トマス・アクイナス (1225-74) などに受け継がれ、フランチェスコ・ペトラルカ (1304-74), フィッチーノ (1433-99), ピコ・デッラ・ミランドラ (1462-94) などのルネサンス人文学者, さらに, ジョルダナーノ・ブルーノ (1548-1600), ジョン・ディー (1527-1608), ロバート・フラッド (1574-1637), そしてジュリオ・カミッロ (1480 頃-1544) と, ざっとではあるが, 以上のようなそうそうたる面々に着実に継承されていったのであった¹²⁾。

神が定めたもうたモノの秩序を根拠にして, コトバの, あるいは概念の分類体系を編纂し, 検索機能を盛り込んで活用システムを構築しなくてはならない。そのためには, 世界は事物事象が正しく納まり返る, 几帳面に整理整頓された保管庫のようなものでなくてはならない。でなければ, 世界は無造作にモノを収納しただけの物置と変わらなくなる。そんな几帳面な神の意匠を明らかにし, それを写し取るような図面を描けないだろうか。それだけでなく, 情報を場景化し, 名札をつけて整理し, どれでもすぐに探り当てられるようにする。収納したモノ=情報の在処を想起する検索術でなくてはならないのだ。標本箱, 驚異の部屋, 博物館, 美術館, 図書館は, ある意味, 伝統の記憶と想起の術を迅速かつ確実に実行できるようなシステムとして具現化していったのである。これを現代版記憶術として展開したのが, ワールド・ワイド・ウェブ (WWW) と検索エンジンといえるだろう (後述する)。

3.2. 記憶術から帰納法へ

記憶術は 16 世紀から 17 世紀にまたがる科学革命期において, 科学の方法論を確立しようとする気運のなかで再評価されつつあった。パオロ・ロッシは『普遍の鍵』でこうしている¹³⁾。

もうひとつ別の分野, 世俗学芸とされる弁証法や修辞学の別のテーマを

めぐる厳密な論争にも配慮し、数学と幾何学の発展に関心をもつた別のサークルにおいて、16世紀中葉以来記憶問題や記憶術規則を発見術や知の伝達法改革とかかわるようなずっと幅のある研究に組み込もうとするド・ラ・ラメーの構想が、徐々に熟してゆきつつあった。

ド・ラ・ラメー（1515-72。ラテン名、ペトルス・ラムス）は、キケロの修辞学を取り入れて論争術としての弁証法的論理学を考案したことで有名であるが、ここは、情報の情景化を活版印刷術を活用して表覧の作成へとつなげ、「記憶術規則を発見術や知の伝達法改革とかかわるようなずっと幅のある研究に組み込もうと」したというロッシの指摘を繰り返すにとどめたい。ロッシは、さらに続けてこういう¹⁴⁾。

〈記憶の一助〉という問題は、17世紀前半、方法改革にあてられた書物に多大の反響を呼び起こすことにもなる。やがてベーコンは記憶への奉仕に学問の新しい方法を構成する原理をみることになる。デカルトもやがて枚筭に関連して、危弱な生得記憶の補強を目的とする思考の運動について語ることになる。

ベーコンがホッブスにしきりに説いていた幾何学の効用は、おそらく場所記憶術がらみの情報「検索」を前提にした知の情景化、図表化、チャート化に関連しているだろう。ここでいう「思考の運動」とは発見の道具としての記憶術を科学的方法論へと再編し、自然に作用を及ぼして加工しようとする能動的な理性を反映させたものとして受けとめたい。ロッシはさらに、こうことばを継ぐ¹⁵⁾。

ベーコンの帰納法は、全面的に……**図表理論**にこそその基礎をおいていることはまちがいない。この理論は、自然界を秩序づけることによって、

事物の混沌とした多様性に秩序と序列を導入し、知性が实在の関連をたどれるように立案された……。

「帰納法は、全面的に……図表理論にこそその基礎をおいている」とは、興味深い指摘である。確かに、経験的に入手した個々のモノを比較吟味する帰納法が機能するためには、標本（データ）の配列は、事物の存在論的な根拠のもとに、その在り処が自然の本質（一般法則）を表すように正しく定められていなくてはならないからである。

配列法によって世界の秩序を眺め渡し、範疇化できそうな事物を囲い込み、そのなかの共通項を看取する。観察や実験のデータを表覧に納めると、データ間の比較照合のなかから共通項、すなわち「本質」（コトバ、概念）を探り当てやすくなる。この点においても、表覧リテラシーは記憶術に根をもつ帰納法的実践へとつながるだろう。そして帰納法であれば、事実モノをいわせる建前からいっても、科学的仮説の更新が容易である。頭ごなしの演繹法ではなく、それを通じて経験的に真理に近づき、漸次的に上昇して最後にもっとも普遍的なものに到達する。それがベーコンのいう発見の術、すなわち「帰納法」の要諦であった。そんな表覧的思考法の流れを演出したのが、当時の先端技術であった印刷術を駆使して大学のカリキュラムを改革したド・ラ・ラメーであり、その影響のもとに総合的な学問の分類を提案したベーコンであったといえるだろう。

3.3. 記憶術から創造の結合術へ

記憶術とは既存情報の保管や検索にとどまるものではない。保管しても活用されなければ意味がない。思考の素材となる様々な情報を頭の中に分類・収蔵し、それらを即座に検索して新たな配列に組みかえる。書物や図書館はかつて、そうした情報項目の置換によって、創造や発見へと導く工夫が仕掛けられていたことを、『記憶術と書物』を書いたメアリー・カラザースは力

説する¹⁶⁾。それはとりもなおさず、記憶した情報は想起されるときに自由な結合遊戯へとつながらなくては意味がないからである。

手繰られた記号列は、組み合わせ（置換）の術にのっとって思いがけない概念をも引き出して、思考の新機軸を生み出す駆動力とならなくてはならない。これが詩の創作にもっとも典型的な形であられるのだと、ノヴァーリスやシュレーゲルをはじめとする近代の詩人たちを例に挙げながら『アルス・コンピナトリア』¹⁷⁾を書いたジョン・ノイバウアーはいう。詳しくはこの本にあたっていただくとして、わたしとしてはここで、そういう想起と創造を促す記憶術の効能と思われるものを、こんなふうにしてみたい。

幕があいて最初の登場人物が舞台の袖からあらわれる。なにもない舞台中央を指差して「おや、こんなところに切り株がある」と発声する。すると、わたしたち観客は記憶の蔵から切り株のイメージを引き出し、それを舞台に発生させる。役者が舞台の袖を見やりながら「向こうの川岸を歩いているのはメアリだな」と独白すれば、わたしたちは岸辺を歩いていく女性を想像する。「今朝は鳥の鳴き声がやけにうるさいな。ああ、リスがこっちを窺っている。風が気持ちいいな。木漏れ日が地べたに落ちて星明かりのように揺れている」というと、鳥が鳴き、リスが現れ、風が吹き、木漏れ日が地べたに落ちて、光と影の模様を緩なしはじめるだろう。

観客は幕が上がるなり、役者のスピーチアクトに誘導される準備をし、舞台上で演技する役者の台詞（コトバ）に喚起されて、脳のなかに収納されている情景（モノ）を生成させる。役者に名指し（コトバ）によるモノ生成の権限を与えているわたしたちは、その眼差しと名差しのその先に、モノを生起させ、関連する概念系列を手繰り出し、空っぽの空間に有意味な情景をつぎつぎに出現させるのだ。

どうだろう、これはプラトンのいう命名者、あるいはエデンの園の動物たちに名を与えるアダムにも等しき言霊的スピーチアクトではないだろうか。創世と創作の秘儀は、ここにおいて、宇宙の誕生と事物の生成にかかわるこ

とが暗示されるのである。

3.4. 記憶術から表覧シンボリズムへ

事物を集めて仕分けし、名を宛がって概念のテーブル（表覧）をこしらえる。そんなテーブル文化が重層的に織り込まれていった近代世界の諸相を、一連の著作で次々に浮き彫りにしてきた高山宏は、こう要約する¹⁸⁾。少し長くするが引用しよう。

……集め、秩序化するとはまた博物学の営みに他なるまい。博物館や図鑑は、かつて静物画においてテーブルが占めたと同じ、世界の「構造化」の役割を占めるだろう。遠近法のテーブルにいたっては、そもそも「構造」化そのものと同義であるはずだ。絶対主義ハイアラーキー（階層）の整備、自然の分類といった「秩序化」ないし「構造化」とは、即ちこれは直截に〈近代〉の問題である。17世紀から19世紀にかけて、世界が西欧主義の下に構造化されていく過程で、〈テーブル〉はそのパラレルな意味体系のすべてをフルに機能させた。世界の「法」化、世界の「表」化。世界がテーブルと化していくそうした趨勢を17世紀以降急成長する「卓」としてのいわゆるテーブルのファッション史がそっくりなぞっているのだと言うべきだろう。

中心にある一個のテーブルが部屋を部屋たらしめるのとまさに同じように、一冊の本もテーブルを中心にして本になる。テーブル・オヴ・コンテンツ即ち「目次」があることで、その本は秩序化されるからだ。数の世界がマルチブ리케이션・テーブル（九九表）で、元素の世界がピリオディック・テーブル（周期律表）で秩序化されているように、われわれの日常もタイム・テーブル（日課）で、そして一国の交通網もまたタイム・テーブル（時刻表）で規定され、明快に図解されている。世界の「秩序化」ないし「構造化」はおそらく必ずやテーブル象徴を要

請するのであろうと考えられる。

すばらしい要約である。これでいくと、わたしたちの文明のどこを切開しても、金太郎飴のように同じ顔をした表覧シンボリズムの秩序や構造を認めることができるということだろう。分類体系のなかで各項目の所を得た配列と配置は、おのずと「本質」を表すとは、先ほど述べたことである。その本質を握られたら、モノだって人間だって支配され操作されるのだ。

制覇の方法論になりおおせた表覧シンボリズム——たとえば、地図、コンパスの表示盤など——は、大航海時代から19世紀の植民地時代にかけて精度を高めて、世界を我が物顔に蹂躪した欧米の軍艦の構造と機能にも反映している。ジブラルタル海峡の「ヘラクレスの柱」（ヨーロッパの限界）を超えたヨーロッパの帆船は、高速蒸気船へと進化していくあいだにも、当時の先端技術の粋をありったけ搭載し、航海のたびに技術を向上させていったが、同時に強力な兵器へと化けた表覧シンボリズムは、未知の海洋に訪れては片端から投網し、一切合財をかっさらう事物収奪の武器になったのだった。つぎつぎに改訂されていく地図、船員たちの管理体制、戦略、指揮系統、そのすべてが索引付き図面として体系化され、標的である異国についての情報は、博物資料と言語資料として名札付事物でもって記録され、それもつぎつぎに改訂され精度を高めていったのだった。西洋世界は、これらを百科学体系でもいうべき情報を装備して、全世界を周航し、ついには地球の覇権を握るに至ったのである。

全知識を書物機械に囲い込みたい、あらゆる知識を我が物にし、いつでもどこでも活用できるようにしたい。好きなときに主題系列を手繰り出して創造のよすがとしたい。万学の体系図をこしらえたい。これ自体は純粋な知識欲を飾り立てて正当化する立派な物言いである。しかしその裏に、わたしは、世界支配を有効に推し進めるための政治経済的な思惑を透かし見る。火薬と羅針盤と印刷術の革新性を力説したベーコンは「知は力なり」と唱えたが、

それはようするに、「事物記号」と「哲学文法」で構成された表覧シンボリズムを武器へと変える新機関を標語にしたものであったのではないだろうか。他者を支配し駆動するエンジンとしての「知は力なり」ということではなかっただろうか。

4. 世界相互参照——モノの検索、コトバのエンジン——

4.1. 情報の順列組み合わせ

17世紀から19世紀半ばにかけて、ヨーロッパ人は事物や世界の有様を明確な方法論のもとで記述し去り、それを百科全書に収めて所有しようと考え、世界中から集めた膨大な情報を整理し参照するシステム作りに腐心した。西洋の知識人たちは、プラトンとアリストテレスにはじまって、以来連綿と全自然を説明し尽くそうと欲望したが、それを書物にまとめることは、畢竟、百科全書の執筆を意味していた。G. W. F. ヘーゲル (1770-1831) が自らの自然哲学の大系を、「エンチュクロペディー」(百科全書)と呼んでいるのは、ヨーロッパ思想の特徴をそう総括したいからであったとって差し支えないだろう。

哲学、すなわち、百科全書は、人間の知識を主題別に網羅した大ぶりの書物であった。ただ、盛り込むべき情報項目が増大し多様化すると、主題系列そのものを整序することはできても、全項目を執筆したり通読するのは不可能になる。かりに可能だとしても、収録漏れの情報、新たに生まれた情報が洪水のように押し寄せてきて、すぐにも大哲学者の頭脳をもってしても扱い切れなくなるのは目に見えている。どんなに記憶術を窮めても、いかに効率的な情報整理術を工夫しても、ひとり人間に扱えるものではなくなったのである。その結果、百科学体系の構築そのものが、生身の人間の知性と記憶力に依存するものではなくなり、集めた情報を構造化していく方法論とシステムそのものを追求する方向へと切り替わっていったのだった。

それにしても、百科全書はひとつの書物形態としてじつに面白い。人間の知識を満遍なく納める建前であるが、それぞれの項目はそれなりの分量の読み物にもなっている。項目が多いので通読は大変であるが、アルファベット順に並べておけば、読者は好きな項目からひとつひとつ読み切ることができる。アルファベット順は情報の秩序＝順序を保つための方法であるが、アルフレッド・W・クロスビーのいうように、「数列のように抽象的なシステムなので、配列する情報の相対的重要度を判断する必要がない。それゆえに、むしろ普遍的に使用できるのだ。このシステムを用いれば、字引でも、聖書や古代ギリシアの文献の用語索引でも、蔵書も目録でも、政府の書類でも、秩序立てて配列することができる」¹⁹⁾。しかしそれゆえに、通読によって得られる起承転結、主題系列は失われ、著作の主題や焦点は書物空間の随所に散逸してしまう。字引としては便利であるが、各項目が脈絡もなく主題系列もなせずに ABC 順に並んでいるだけというのは、確かに書物としてはいびつである。

というわけで生まれたのが、相互索引付アルファベット順「百科事典」であった。

4.2. 情報の相互参照

百科事典を英語で *encyclopedia* というが、古代ギリシャ語の *enkýklios paideía*, すなわち一般的知識を意味する「満遍なき教育」に淵源する²⁰⁾。こうした一般的知識を満遍なく修めた哲学者が、ひとりで「百科全書」を書き上げた時代があったのだが、情報爆発以降、万卷の書を喰い尽くす知的グルマンは過去の遺物になり果てる。百科全書は「綴る」のではなく「編む」ものになったのである。「編む」システムそのものは、すでにスコラ学者たちの尽力によってノウハウが考案されていた。

クロスビーによると、書物の内容を小分けにして示す目次という革新的なシステムを考え出したのは、スコラ学者であったようである。たとえば、

「目次は目の粗さが異なる篩面を何層か重ねた篩にたとえられる。まだ整理されていない漠然としたアイデアをこの篩に投げこむと、最初に総論的な主題が選別される。スコラ学者の発明を現代流に表現するなら、これらの主題は I, II……という記号で表記される。次に見出しが選別され、これは A, B……と表記される。ついで小見出しが選別され、1, 2……と表記される」²¹⁾ といった具合にこの操作を繰り返す、いまとなっては当たり前の文章整理法であるが、じつはこれは、フランシスコ会修道士パリ大学教授、ヘールズのアレクサンドル (1180 以前-1245) によるものであったようだ。これもやはり、情報を分かりやすく場景化する場所記憶術の伝統に連なるものであることは容易に見てとれる。

実に興味深いことである。中世のスコラ学者たちが論証の迷路に迷い込まないように工夫の限りを尽くしてきた伝統が、活版印刷術と結合し、ド・ラ・ラメーが提案したような革新的な着想を生み、ついには科学革命の担い手たちの方法論に取り込まれていく継承の流れを辿ることができるかもしれないのだ。そんな伝統が満遍なき知を項目立てで網羅しながら、全体として体系性を維持し、なおかつ各項目が相互に参照し合う知のネットワーク、すなわち、クロスレファレンス・システムによって成立する百科事典を生んだと考えると、ひとつの書物形態に織り込まれた諸観念の歴史的な厚みに感慨を抱かざるをえないではないか。

このシステムを採用すると、好きな項目に到達して読んでも、そのなかに記されたキーワードを手掛かりに、関連する項目間を横断的に相互参照して主題を串ぎしにし、そのつど読者なりの (主題) 系列を築くことができる。情報の途切れなき連結によって、理論的には読者の数だけ結合術的に新情報を無限創出することにもなるのだ。

クロスレファレンス (相互参照) をはじめて本格的に採用して『サイクロピーディア』(1741-43) を著したのは、エフライム・チェインバーズ (1680 頃-1740) である。デニ・ディドロ (1713-1784) やジャン・ル・ロン・ダラ

ンベール (1717-83) は、その形態を模倣して『百科全書 — 学問・技艺・工芸の合理的事典』(1751~72) を編纂したのだった。そして主題別語彙系列と ABC 索引の組み合わせで『シソーラス』(1852) を書き上げたのが、ピーター・マーク・ロジェ (1779-1869) であった。

こうした太古からの事物照応に淵源するアルファベット「順序」、主題別項目立て、相互索引付きの事典、辞典編纂、などなど、数々の技法や工夫が模索されてきた歴史については、トム・マッカーサーが事物参照のシステムと辞書の西洋史を論じた『辞書の世界史』につまびらかであるが、ここはひとまず、いまもっとも網羅的で壮大な展開を見せている発明について簡単に言及しておこう。地球を覆い尽すインターネットと、情報管理のさまざまな方式によって入り組んだ様相を呈しているワールド・ワイド・ウェブ (WWW) である。

史上最大の情報アーカイヴである WWW (コンテンツ) は、紙媒体を、地球上に張り巡らされた電子網、すなわちインターネット (コンテナ/メディア) へと移行させただけのものではない。この増殖を続けてやまないコンテナに日夜収納されていくコンテンツが、今後どう変貌を遂げていくか興味は尽きないが、少なくとも、このシステムが情報のリンクを張り巡らせて満遍なき知への道をひらいている点では、相互参照の百科事典システムに連なるものであることは確認できるだろう。そしてなによりも、本稿の文脈では、西洋の知的伝統の延長線上にある知識欲を満たすために人間が連続と繰り広げてきた世界参照法の変遷史に連なるものであることは間違いない。

いまや検索エンジンの代名詞になったグーグルのテーマが「増殖する地球上の情報をすべて整理しつくす」となっているのは、そのことを裏づけている。検索エンジンとはすべての言語におけるすべての言葉の組み合わせに対して、それらに適した情報を対応させるシステムのことであるが、グーグルはこの検索エンジンを駆動力にして「知の世界の秩序」の再編成を目論んでいるのだ²²⁾。

確かにグーグルは、自分たちでは作っていないコンテンツを収集・リスティングし、そのナビゲーションを提供しているにすぎない。地球上のどこかのウェブページにアップロードされた無数のウェブデータを収集し、そこに含まれる文字や画像を整理し、数百億に及ぶウェブページを体系づけてユーザーに提示しているにすぎないが、そのテーマの設け方、そして情報を収集し管理し活用するシステムそのものへの傾倒ぶりは、紛れもなくウィルキンズやライブニッツのものであり、17世紀科学革命期の普遍言語運動や哲学文法、啓蒙期の百科事典の正統の嫡子である。

さらには、英国図書館の管理運営を大きく前進させたアントニオ・パニッツィ (1797-1879)、世界中の図書館の本を見事に整理する「デューイ十進法」を考案したメルヴィル・デューイ (1851-1931)、「万有世界書誌」と「ムンディニウム・プロジェクト」のポール・オトレ (1868-1943)²³⁾、などなどの理念を引き継いで、ハーバード大学、シカゴ大学、オックスフォード大学など、最高峰の正統的図書館のデジタル化を推進しつつ²⁴⁾、アマゾンやウィキペディアに蓄積されつつある集合知の情報空間をも取り込んで、全世界で共有すべき知識、ひらかれた知の資産 (オープンソース) — たとえホントもウソも混ぜこぜであろうとも — を網羅し制御し尽くそうと目論んでいる点からいっても、古代ギリシア以来の知と力の継承者であることは疑う余地もない。

《注》

- 1) これら楽しい言語の創作遊びは、ジェームズ・ノウルソン (浜口稔訳) 『英仏普遍言語計画』(工作舎、東京、1993. 4, 1-415) の第四章「想像の旅と想像の言語」、マリナ・ヤグエーロ (谷川多圭子+江口修訳) 『言語の夢想者 — 十七世紀普遍言語から現代SFまで』(工作舎、東京、1990. 10, 1-339) を参照。
- 2) フランシス・ベーコン (服部英次郎、多田英次訳) 『学問の進歩』(1974, 岩波文庫、1974. 1, 1-396) 236頁参照。
- 3) 普遍言語と記憶術の関連についての論じたパオロ・ロッシ (清瀬卓訳) 『普遍の鍵 — ルルスからライブニッツにいたる記憶術と結合論理学』(国書刊行会、東

- 京, 1984) より。
- 4) 渡部昇一『秘術としての文法』(講談社学術文庫, 東京, 1988. 1, 1-229) 13-14 頁を参照。
 - 5) フランシス・ベーコン(桂寿一訳)『ノウム・オルガナム』(岩波文庫, 東京, 1978. 6, 1-253) 97 頁を参照。
 - 6) ベーコン『学問の進歩』235 頁。
 - 7) ジェイムズ・ノウルソン『英仏普遍言語計画——デカルト, ライブニッツにはじまる』浜口稔訳, 工作舎, 42 頁よりの孫引き。
 - 8) John Wilkins (1669) *An Essay towards a Real Character and a Philosophical Language*, Works in the History of Language, Thoemmes Press, 2002, p. 451.
 - 9) ゴットフリート・ライブニッツ(米山優訳)『人間知性新論』(みすず書房, 1987. 12, 1-642), 259 頁を参照。
 - 10) ライブニッツ, 前掲書, 邦訳版 403 頁を参照。
 - 11) ここは, ダニエル・ブラスティン(鈴木主税/野中邦訳)『本はいつごろから作られたか』(集英社文庫, 1991. 9, 1-296) 138 頁より引用。
 - 12) それについては, 邦訳版だけでも, まばゆいばかりの名著がある。ここは目を通したフランセス・A・イエイツ(玉泉八州男監訳)『記憶術』(水声社, 東京, 1993. 6, 1-519), パオロ・ロッシ(清瀬卓訳)『普遍の鍵——ルルスからライブニッツにいたる記憶術と結合論理学』(国書刊行会, 東京, 1984), メアリ・カラザース(別宮貞徳監訳)『記憶術と書物——中世ヨーロッパの情報文化』(工作舎, 東京, 1997. 10, 1-537) だけ挙げておく。
 - 13) ロッシ, 前掲書, 186 頁。
 - 14) 同上。
 - 15) ロッシ『普遍の鍵』224 頁。
 - 16) カラザース, 前掲書を参照。
 - 17) ジョン・ノイバウアー(原研二訳)『アルス・コンビナトリア』(ありな書房, 東京, 1999. 10, 1-302) を参照。
 - 18) 高山宏『終末のオルガノン』(作品社, 東京, 1994. 8, 1-332) 15-17 頁参照。
 - 19) アルフレッド・W・クロスビー(小沢千重子訳)『数量化革命』(紀伊國屋書店, 東京都, 2003. 11, 1-352) 88 頁。
 - 20) トム・マッカーサー(光延明洋訳)『辞書の世界史——粘土板からコンピュータまで』三省堂, 1991. 6, 1-348) の第 5 章「タクソノミー志向——類(class), 上類(classic), 分類(classification)」を参照。
 - 21) クロスビー, 前掲書, 89 頁を参照。
 - 22) このあたりの議論は, 梅田望夫『ウェブ進化論』(ちくま新書, 東京, 2006. 2, 1-256) が参考になる。
 - 23) 桂英史『インタラクティブ・マインド——近代図書館からコンピュータ・ネッ

26 明治大学教養論集 通巻423号 (2007・9)

トワークへ』(岩波書店, 東京, 2002.12, 1-237)を参照。

24) デビッド・ヴァイス (田村理香訳) 『Google 誕生』(イーストプレス, 東京, 2006.6, I-470) の21章「図書館デジタル化プロジェクト」を参照。

(はまぐち・みのもる 理工学部教授)